

「ウサギの葉っぱ」 <幼稚園児と保育園児のかかわり>
常磐会短期大学付属泉丘幼稚園・堺市認証保育所いずみがおか園（大阪府堺市）

園庭へ出たすぐの所に、ウサギ小屋があり、3月に新しく仲間入りした灰色のミニウサギ（ぴょん）と白黒のウサギ（らび）が1羽ずつ一緒にいる。

ウサギはいつも子どもの心の寄りどころとなり、和ませてくれる。特に新しく入ったミニウサギは体が小さく仕草もかわいいので小さい子どもにとっても親しみやすい。年長組は、毎日当番が交代で野菜を切ったり掃除をするなど世話をしている。

保育園の子ども達もお散歩の行き帰りに先生や友だちと一緒にウサギを見てばいってきまーす！「バイバイ」と手を振ったり、家から持ってきた野菜をあげたりしている。

幼 児 の 姿	保 育 者 の 思 い と 考 察
<p>《1歳児あひる組と年長組》</p> <p>保育園の子どもが散歩へ行く前にウサギを見ていると年長の女児がやって来て「クローバー食べるねんで」と言ってその場を去っていった。</p> <p>保育者は「いいこと教えてもらったね、ウサギさんの葉っぱ探しに（お散歩へ）行こうか」と子ども達に声をかけ散歩に出かけた。</p> <p>公園に着くと子ども達はブランコに乗ったり、タンポポや目に留まった草花を袋に集めて遊んでいる。その中でA児はクローバーを手いっぱい持っていた。</p> 	<p>年長児は、保育園の子どもはきっと知らないと思って知らせに来てくれたのね。突然なことでびっくりしている子どももいるけれど、こんなふうに幼稚園の子どもが自然にかかわってくれることは嬉しいわ。</p> <p>年長児にとっては、年少・年中時に「ウサギはどんなものを食べるのか」ということを遊ぶ中で見たり聞いたり試したりして知っていた。年長児はウサギを見ている保育園の子ども達に知らせたくなったのだろう。すると同時に照れくさくなりそのまますぐに姿を消していった。知っていたことを誰かに伝え教えること、知らせることが嬉しく思えることは素敵なことではないか。</p> <p>1歳児にはついさっきの出来事や、目の前にないものを思い出すことって難しいわ。A児は年長児が言っていたことが心に残っていたのかしら？</p> <p>保育者の「いいこと教えてもらったねえ」という言葉で、幼稚園児に対して戸惑っている子どもの気持ちが和らいだ。また「クローバー」から「ウサギさんの葉っぱ」と言いかえることで子ども達にわかりやすくなり、いつもの散歩にも楽しみをもって出かけられた。年長児に知らせてもらったからと無理強いすることなく、各々が好きな遊びをすることを大切に、その中で数人の子どもが「ウサギさんにあげようね」とクローバーを集めて遊んだ。</p>
<p>《2歳児うさぎ組と年長組》</p> <p>保育園の子どもは幼稚園の子どもがウサギに葉っぱをあげているのを見て、ウサギ小屋の横に植えているキンモクセイの枯れた落ち葉を拾ってきて網のあいだから「ラビちゃん」とウサギを呼んで喜んで見ている。すると「そんなん食べへんで」と後ろから幼稚園の子どもが声をかけた。</p> <p>幼稚園に姉（T児）がいる保育園のS児は、「これやったら食べるでー」とクローバーを手渡してもらった。保育者が「それどこにあるの？」と聞くと「山のところ」といって連れて行ってくれた。「やわらかくて緑の葉っぱ</p>	<p>同施設内に兄弟がいるってこんなかかわりができていいわね。他の子ども達にもクローバーがあるといいなあ。</p> <p>「どこにあるの？」と保育者が聞いたことで、ウサギの葉っぱのある場所が子ども達にもわかり、自分が採ってきてあげたものを食べてくれることをとても喜んでいる。それが楽しく、もう一回採りにいこうと保育者を誘ったり追いかけたりしながら、何度も繰り返すようになった。他の子ども達にもやらせてあげたいという気持ちや、幼稚園の子どもが手渡してくれたことをきっかけに知らせようとしたことが、子ども同士のかかわりを深め、幼稚園児は保育園の子どもに優しい気持ちで接することができ、また保育園の子どもにとっても「教えてくれた！」と心地良さを感じ、互いにいい気持ちでかかわれたことにつながった。</p>

食べるんやねー」と、採ってきたクローバーがなくなると、またさっきの場所に探しに行こうと催促し、摘んできてはウサギ小屋の前に座って葉っぱをやった。

中にはキンモクセイの葉っぱを拾う子どもがいた。保育者は「この葉っぱは硬いからウサギさんおなか痛くなるよ」と声をかけると、共にウサギ小屋の網に押し花で表示してある「食べる葉っぱ」「食べない葉っぱ×」を見ている幼稚園の子どもに「この葉っぱは食べるかなー？」と聞きながら「あかんねん、ほら×になってるやろ」と教えてもらい知らせていった。

散歩にでかけても「これウサギさん食べる？」と聞く姿も見られ、幼稚園に持ち帰るようになった。

また、小屋の表示を見たり葉っぱを表示に当て幼稚園児や教師の真似をするようになり「まる」（食べられる）「ぶつぶー」（食べられない）という声も聞こえてきている。

表示には子ども達にわかりやすいよう本物の葉を使用したので、見比べやすかった。押し花にしていたものの、時間が経過するにつれ色が変化し、わかりづらくなってきたので写真などを用いて表示し直す環境の再構成はよかった。



《総合考察》

- ・ 保育園・幼稚園の子ども達は、生活・遊びの場を共有し、互いの存在を目にしながら過ごすので、興味のあるウサギを介して自然にかかわる機会がもてた。
- ・ 保育者は幼稚園児・保育園児の架け橋的な存在となり、子どもの気持ちや言葉を保育園の子どもと同じ目線で聞き、幼稚園児に問いかけたり、受け止めた。このことで、幼稚園児は、教えてあげられた喜びを感じることができた。
- ・ キンモクセイの葉はウサギにとってよくない葉ということを知っていることで、子どもに知らせたり、調べたりすることができた。年長児はそれから得た知識を遊びの中で他学年の子どもに伝えたり、どうすればもっとわかりやすいかということをし話したりして、表示作りへとつながった。その表示を通し年長児がいなくても、ウサギの食べる葉を気をつけながらやろうとする小さい子どもの姿が自然と増えていった。

みどころ

一人ひとりの子どもの興味や欲求、クラスの子どもの実態や学級経営などにより飼育する飼育物と、園のみんなのための飼育物とでは、子どもたちのかかわり方はもちろん、環境としてのあり方も違います。この事例のウサギのように、いつでも誰でも楽しめる飼育物の存在は、異年齢の子ども同士がかかわり合う場面になり、それぞれの子どもの、飼育物とのかかわりも子ども同士のかかわりも深めることにつながる環境になります。ウサギへの思い、年下の子どものための思い、優しくかかわってくれる年上の子どもたちへの思いを、ことばや行動に結びつけています。